田中一閑の許より、所勞訪尋として消息あり。
葛卷氏何がしの御方、心地例ならずなやみ給ふとなん聞侍りて。

白鷗軒

日に夜を繼て仕し人なれば身にいたつきの積りとやしる

白鷗軒の御許より、やつがれが所勞のこと、恪勤によて身にいたつきなど、おほな〳〵とふらひ聞えさせ給ふ返し。

むべし社身にいたつきの入にけれ花の邊りと思ふ深山木

一、七夕

七夕のまれに逢瀨の岩枕いはでもしるゝきぬ〴〵のそで

年にまつ恨はよしや七夕の契りたえせぬかさゝぎのはし

年ごとの秋の今夜に馴初て契りふりせぬほしあひのそら

七夕の神代にかけしたまかづら心ながくも戀わたるらん

さして思ふ心もくるしひこぼしの妻待ちわたる鵲のはし

天の河水のみなかみたづねゆかば七夕つめの袂ならまし

一、父の遠忌に

十二日。父の遠忌にあたり侍りけるに、打曇たるあしたの空も、藤の衣の色なる心地して、猶物思ふさまなりけるぞいと佗しかりける。

うちくるる雲の衣の色にさへ思ひかさなるいにしへの空

月前懷舊といへることを

めぐり來ぬ三十あまりのみつせ河涙いろそふ秋の夜の月

一、十三夜立秋

今朝よりの秋にむすびし白露もしげき軒端のをぎの初風

武藏野や露はる草のはる〴〵と雲井にかよふ荻のはつ風

おく露もことに亂れて今朝よりの秋風しるきにはの荻原

秋夜偶作

秋來夜々斷二人腸一。欹枕悄然臥二草堂一。竹裏淸風五更雨。松間殘月半庭霜。

一盞寒燈挑欲消。茅齋終夜思迢々。竹風破夢北窓下。曉月雞聲共寂寥。

題二山居一

暮雨晴來風色遙。空山鐘響月蕭々。林泉淸冷□門外。閒坐應憐遠二市朝一。

一、田中一閑へ餞別の歌

八月四日。近日田中一閑屬二御使者前田權佐恒長一て、會津土津神社へ罷越候に付、餞別の和歌如左。

白鷗軒、月の頃みちのくにへまかるを送り侍るとて。

月になほ忍ぶむかしの秋風も身にしみてこそ白川のせき

又別にさきの一首にて猶ことたらず、改て又書付候。

此兩首の內、若し御心に叶ひたらんも候はゞ御留、一首は御返しと書付遣す。

歸るさを待とし知らばしら川の關もるつきも心とゞむな

旅衣うらやましくも思ふかな月に越ゆべきしら川のせき

如此申遣候處、歸るさをの詠留度候へど、月にとあらばと存じ、月に越ゆべきを留る由也。此鄙詠最初月にと詠ず。然共少けやけき樣にてもと改る也。

一、田中一閑より手簡到來

五日。田中氏より手簡到來。昨日歸るさをの詠、月に對しての理を風と思ひ誤り相返し候。西行の詠歌思出、吟翫不淺候條、重て可相送由也。依之遣之。但餞別の意たしかにいふべくは、月にと可有之候勿論也。依て月にと改たるをも添遣す。いづれにても甘心あらんかたに可有治定と申達候。彼此珍重と存か。

一、土津神社大祭の使者

一閑儀九日に首途、會津へ罷越に付、八日夜御前へ被爲召御懇の上、御廣蓋を以て御羽織拜領、退て有賀甚六郎を以て金子被下之。前田權佐は十一日發出に付、前夜於御前時服三領御羽織被下之、於御次判金三枚被下候。於猪苗代御口上の趣は、御當社御造畢以後、早速御名代の御使者可被遣候處、折も無御座候ては如何と御控被成候。今年御大祭御執行の段被聞候に付、此度以御使者御目錄の通御獻納被成候間、萬端宜敷思召候由、御家老西鄕賴母・井深平左衞門、又は惣奉行躰の者の內へ可申含候。御目錄調樣檀紙一重。

獻上

御太刀　備前吉房　一腰
御燈籠　金銅　一對
御馬代　黃金十兩　一匹
以上

加賀中將　尊名

右御燈籠各白木の桐箱入、上に書付有之。

金銅御燈籠